

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年5月） 回覧

9. 葛飾八幡宮の元亨の梵鐘

寛政5年（1793）に、江戸の文人達を驚かすニュースが飛び込む。

「寛政五丑年正月十九日、下総国葛飾郡八幡村葛飾八幡宮本社右（向かって左側）にありける古木の樫枯けるによりて伐取、其根掘出しける下より鐘壺を掘出す。高三尺七寸五分、径二尺一寸、龍頭七寸五分。二月十五日始めて撞く」（『壺芦園雑記』）

鐘は神社に現存し、千葉県重要文化財である。銘文を読み下すと以下の通り。

「敬いて冶鑄奉る銅鐘。大日本国東州下総
第一鎮守 葛飾八幡 是れ大菩薩は 伝え聞く
寛平に宇多天皇の勅願の社壇。建久以来は
右大將軍の崇敬 殊に天長地久に勝れり。
前には巨海が横たわり、後ろには遠村が連なり、
魚虫は性動す。
鳧鐘は暁の聲となつて 人獣は眼を覚ます。
金啓は夜に響き 求めて煩惱を除き 能く菩提
を証す。

元亨元年辛酉十二月十七日 願主右衛門尉
丸子真吉 別当法印智圓」（写真は県 HP より）

（注）寛平（889～898）、建久（1190～1199）は年号。右大將軍は源頼朝。天長地久…天は長く、地は久しいように、いつまでも変わらない。魚虫…魚や、は虫類も含む虫。鳧鐘、金啓…共に鐘の音の意味。煩惱…身心を乱し、悩ませるもの。菩提…悟りの境地。

歴史小話2で述べたように当地は市川砂州上で、前に遠浅の東京湾（当時は「真間ノ浦廻」と称す）が広がる様子が「前横巨海」で表現され、「後連遠村」と前・後で対句になり、対句は「鳧鐘暁聲」と「金啓夜響」の暁・夜でも用いられています。鎌倉五山文学（鎌倉の五つの禅寺の禅僧による漢詩文）の一つでしょう。

智圓は、鐘の奉納の5年前の正和5年（1316）10月に葛飾八幡宮別当（責任者）に補任されるとの史料（「関東御教書」）があります。

奉納者の丸子真吉については不明ですが、元亨元年から30年後の文和2年（1353）に丸子胤宣の名が匝瑳郡熊野社（匝瑳市宮本）の鐘銘に刻まれています。後代の丸子一族の可能性があり、下総・上総に勢力を張った信心の篤い一族とも思われます。

なお鐘には別の書体で「応永二十八年（1421）三月廿一日」と刻されています。鐘の内部に鑄掛の修理を行った跡があるから修理の時の銘と解するのが自然です。

埋められたた経緯は不明ですが、『城と隠物の戦国誌』（藤木久志著）によると、戦乱相次ぐ時代には民衆は掠奪を恐れて隠し穴で自衛し、その発見例は14世紀半ばから15世紀のものが多く、特に千葉県に多い（全国の発見例の約55%）とあります。関東で断続的に28年続いた享徳の乱（1455～1483）の影響とも考えられます。

